

## 南海トラフ巨大地震予知不能

### — 突然襲われる揺れにどう備えるか!! —

日 時：令和元年11月17日（日） 9：35～10：35  
場 所：愛知医科大学病院 大学本館3階 302講義室  
主 催：ドレミの会（腎移植後の患者の会）  
イベント：第9回 ドレミの会 防災講演会  
参加者：60名  
講 師：NPO法人 愛知県防災士会 防災士  
櫻井 衛（副理事長・兼 企画委員長）  
ファシリテーター：阿部

今回の防災講演会の依頼を愛知医科大学病院「ドレミの会」からお受けして、打合せを8月28日（水）に行うことができました。

当病院とのきっかけは、今年の3月17日（日）にJCHO中京病院で腎移植者並びにご家族を対象とした櫻井講師による「防災講演」に同席されていた愛知医科大学病院レシピエント移植コーディネーター渡邊様の橋渡しにより、腎移植後の患者の会「ドレミの会」との接点が生まれました。

開催当日は、進行役を務められた渡邊様から開会及び本日の予定に関するご案内が行われ、続いて移植外科部長の小林教授から開会に際しての挨拶がありました。その後本日メインテーマである防災講演会「南海トラフ巨大地震予知不能」を担当する櫻井講師へと進行して頂きました。

小林教授が挨拶の中でトイレの話に触れられたことから、櫻井講師は冒頭からトイレについて、『地震が起きた時に、食べることも大切ですが、排泄のことは、もっと深刻であり大切なこと』との説明と併せ、簡易トイレ（断水トイレ）について紹介をさせて頂きました。

大規模災害が発生した時の基本スタンスは、**自助70%、共助20%、公助10%**となっており、広域に亘る甚大な災害となれば、公助のウエイトは下がり、自助と共助により最低48時間は生きながらえる“備え”が必要であるこ



とを強調しました。

その他に、南海トラフ巨大地震の可能性が高まった場合の防災対応をまとめた自治体や企業向けのガイドラインが、今年の3月に政府から公表され、臨時情報の「2段階割れ」、「一部割れ」、「ゆっくりすべり」について説き、この巨大地震が発生した場合、東日本大震災との比較から、死者・行方不明者約19,000人に対し、南海トラフ巨大地震は、約323,000人と17倍に膨れ上がるという推定に達し、このように被災人口が余りにも多く、生産拠点を多く失うことは、日本経済の危機的状況が存在していることを示唆し、2018年5月31日の中央防災会議による発表では、建物の耐震化並びに感電ブレーカーの普及等の自助から死者・行方不明者と全壊建物の被害ともに、減少されるとの推定が発表されていることを示しました。

とはいえ、安心の拠り所は、「備え」と「対策」を万全にしていくことが重要であり、日本の活断層は、中部地方にひずみが集中している中、明治24年に濃尾地震の引き金となった根尾谷断層帯、そして、昭和20年に三河地震の引き金となった深溝断層帯、その他にも屏風山・恵那山断層帯、恵那山一猿投山北断層、猿投一高浜断層帯、加木屋断層帯など活断層帯の存在を認知し、教訓を活かすためにも古文書を読み歴史を振り返ることの大切さを説きました。ちなみに、名古屋城や熱田神宮は、良い立地条件の上に建てられていることで証明されています。



最近の地震から見てとれることとして、熊本地震や大阪北部地震、北海道胆振東部地震などから耐震基準に適合している建造物であっても1階が2階に押し潰されたり、或いは、ブロック塀の構造や現状を検証すると傾いていたり亀裂が入っていたりとか、また、液状化現象により建物が傾斜するなど、点検や改善を進めていかなければならない箇所は、身近なところに散見されるという現状を説明し、もともと木曾三川の洲になっている地盤の柔らかい濃尾平野に住んでいる以上、早急に対策を講じなければならないとの警鐘を鳴らしました。また、発災後、北海道全域において、ブラックアウト現象に見舞われ、コンビニ等での買い物は、現金でしか通用しなかったことから、手元に多少現金を置いておく必要が出てきたという事例を紹介しました。

また、阪神・淡路大震災で亡くなられた原因が家具などの下敷という事例から、家具や冷蔵庫の固定方法を写真で具体例を示し、『まだ家具の固定化がされていない家在实际多いという現状を正していかないと、犠牲者は減少しない。だから、固定化する』とのことを受講者へ強く勧めました。

最後に櫻井講師は、地震の歴史は繰り返されることを強調し、本日の防災講

演に関するキーワードを、

防災⇒減災

- ・まず、自分が生き残ること。
- ・そして、地域の人と一緒に災害に立ち向かうこと。

地道な対策や訓練の積み重ねが「減災」につながると述べ、防災講話を終了させて頂きました。

文責・写真：阿部 健二